幼児教育ハンドブックの概要と解説

（お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授 無藤隆）

◇ハンドブックの目的

・配布したハンドブックはまだ完成版ではなく、いくつか原稿や写真が抜けている部分もある。

・途上国の方々、また、その援助に関わる日本の方々に資料として使ってもらおうというのが目的。ただ、幼児教育というのは、考えてみると、教職課程の授業科目を考えれば10 いくつか 20 いくつかあるわけで、それの教科書をやれば全 20 冊になってしまう。また教材作りって言えば、無数に手遊びなど何とか遊びがあり、無限に資料はある。そこから何を取り出すかというのは、第 1 の問題。第 2 の問題は、どのように呈示していくかということで、この半年間色んな試行をしながら、とりあえず今に至った。

◇ハンドブック概要

・3 部構成。第 1 部として、基本的な考え方を、理論的に、と言ってもなるべく易しく書いた。

・中心は第 2 部「幼児教育の実践」で、具体的な日々の幼稚園で必要な事柄を挙げている。幼稚園教育事業みたいなものを持ってくるとか解説書と言うのも考えたが、改めて、もし幼稚園というものを知らないと仮定して読んでみると、非常に抽象的茫漠的に書いてある。やっぱり分かりにくいと思い、もう少し分かりやすく具体的にした。そこを網羅するというよりは、一つの事例を、教材なら一つの教材を挙げて、その意味を理解してもらう、という風にしていきたい。また、なるべく写真をたくさん入れて、それを具体的に分かってもらえるようにする。

・第 3 部はそんなに長くはないが、途上国で実際に幼児教育支援を行うための留意点、また、その中で上手くいっている事例やら活動やらを紹介する。第 1 部第 4 章の「乳児の発達の概要」は保育所保育指針を要約したもので、そんなに新しいものではない。中心は第 2 部の「幼児教育の実践」で,基本的にこれは、普通の日本の幼児教育で簡単に教えなくちゃいけないよ、というときの、概論的なもの。教育課程・カリキュラム、年間の指導案、月案・週案・日案の作り方など。

・「保育内容」では、保育内容についてのポイントを示す。関連して、園の環境構成についても触れた。「保育内容５」では、「文化的活動」と「数量～」という辺りが詳しくしてある。先ほどからのご報告にもあるように、識字教育や、小学校教育とのつながりで、どなたに聞いても、ことば・文字に関わるところと数あたりに関わるところは出してくれ、ということがあったため、少しそれだけは独立した項目にしてある。

・最後の方に、「教材作り」「保護者との連携」「保育者による保育の改善の方法」等出ているが、特に保育者による保育の改善の方法については、日本の幼児教育の特徴と言うの

は色々あるのだろうが、ひとつ非常に重要なのは、幼児教育実践者と研究者との距離が非常に近い、あるいは、幼児教育をやっている先生方自身が実践的な研究を進めている、また研究的な視点を持ちながら自らの保育を振り返る、それが非常に中核にある、ということが日本の特徴だろう。途上国では幼児教育に研究的に関わるという発想がほとんどない。特に大学において幼稚園教育というものが位置づいていないので、そこに非常に難しさがある。このことを、分かりやすく、しかし強調したい。

・第 2 部の 1－1 というところに「保育の原理を実践につなげる手がかり」というものがあり、子ども中心の保育の意味を書いた。さらに「カリキュラム作り」ということで、教育課程とはこんなものなんだよということを示した。また年間指導計画を幼稚園で作るんだ、ということを示していく。

・マレーシアでも、どこの国でも、非常に国が整備されてくると国のカリキュラムが与えられる。それはいいことだが、それが極端になってくると、ある特定の日は 9 時から全国で同じお話を読むなど、もうちょっと柔軟に変えてもいいのではないか、しかし変えると言っても勝手に変えるわけではなく、目標を持って変えると。そういう話を具体的に示したい。

・やはり週案・日案を、自分のいる園の事情に応じて自分の１０人２０人４０人いる子どもたちに即して作る、という習慣を作っていくのは非常に難しい状況。例えば、そのためには、保育が終わった後に、先生方は残って準備をしなければならない。翌日の教材の準備、計画もあるし、週案・日案を作らなきゃならない。そういうことが必要だということを理解させることだけでも大変だろう。そういうことを丁寧に書いていきたい。

・次に、「幼稚園の一日」では、非常に日本人にとって当たり前の、朝 9 時に始まってお母さんたちに連れられて来るんだよ、など。その後、登園後、自由に色々遊んでいるよ、というようなことだとか、意図的に園の部屋の中と外と色んな種類の活動、と、なるべく多様性を入れている。

・生き物に関わる活動、飼育、等、こういった、庭での活動とか飼育・栽培活動も入れるのか入れないのか非常に難しいところ。途上国で反対意見もある。つまり、「そもそも回り全部自然なんだからいらん」という考えもあるし、それから逆に、園庭が非常に貧しいので、動物飼うところじゃないよ、という所もある。しかし都会のスラムもあるし様々なので、やはり入れてみたい。

・子ども中心というのを、多くの場合我々は大事にしたいわけだが、やはり一斉活動というものをどうやっていくかということを入れていかないと、途上国における幼稚園は成り立たないだろう。そのためそのような幼稚園の例が入れてある。

・保育内容では、全部紹介するときりが無い。たとえば、「運動」というところは保育内容でいうと「健康」。山すべり・なわとび・竹馬・ブランコ・うんていなどを入れた。つまり、固定遊具を使うものや、なわとびのような、そこらへんにある地形、そういうものを使ったものでも可能だよ、ということを紹介した。それぞれの風土に合うものを使え

ば、それなりのものはできるよ、ということを示していきたい。

・次に、「折り紙」が 5－2 の所に入っている。折り紙はよく日本人が海外に行ってやるわけで、それがいいか悪いかは難しいところだが、安易にそのまま出すのは、日本の文化をやんなさいよ、と押し付けているわけで非常に好ましくないだろう。そういう意味では、これは日本の文化であり、それぞれの文化で色んな物があるよ、と紹介している。また日本の折り紙っていうのは紙で常に良くできているが、非常に高いため多くの途上国では使えない。そのため、それぞれ手に入るところでやれるよ、ということを強調している。同時に、教育的意義で、文化的遊戯だというようなことや、手の巧緻性が養われる、色を理解するとか形に親しむ、平面から立体を構成する面白さ・達成感、いろんなことを書いた。

・どれも、そういった情緒的な意味合いと共に知的な意味がある、ということを強調している。もっと露骨に「小学校教育に役立つ」と書いたら、皆に反対されたので、それは落としたが、そういうことが伝わるように書いてある。途上国では、小学校での中退・退学というものを止めたい、義務教育を完了させたい、というのが非常に大きなモチベーションであるため、そのための準備教育が幼児教育に期待されているということを受けて。

・5-3 に「言語」がある。これが言葉であり、また文字とつながる部分。絵本のところが、3 つ写真が選ばれている。一つは先生がいわゆる読み聞かせをしている場面。2 番目が絵本コーナー。3 番目は、子ども自身が絵本を眺めている場面。ひとつは絵本というものを豊かな環境の中に入れていくということと、絵本というものを子ども自身が自発的に見るような読む場を作るということと、それから、先生が色々読んであげる、ということを示した。絵本というものが大事であるということと、文章をそこから読むようになって、将来の学校教育に無理なく取り組む力を育てるということ。

・「書く」方では、子ども達が適当なマークを書いている写真があり、そういう中で、次第次第に文字らしくなっていく、というようなことを示している。また、5 歳児がカルタを作る中で、先生も手伝いながら文字を書いたり絵を描いたりしているなど、実際の保育場面の中で様々なことが可能だということを示してある。

・「6 園の環境の構成」という大きな章では、園舎のあり方・園庭のあり方を示している。もちろん、お金がないんだから建物建て直せないよ、というのはあるだろうが、カンボジアの例で言えば、ちょっと水溜り掃除するとか、ゴミを拾うとか、壁面に広告でもいいから貼ってみるなど、できるのではないかと思う。そういう意味では、園の環境のあり方というものを色々示してあげるということは非常に大事だろうと思い、意図的に色々あげた。

・「7 教材作り」で、いくつか本文に出てきたものに関して、具体的な作り方を挙げてある。これは全部、元があるものから写したり書き直したりして体裁を作っているところ。それぞれの国で、自分たちの身の周りにあるダンボールやペットボトルといった素材や木

の実などを使ってどうやって教材を作っていくのか、というようなことが分かる意味で書きたい。

・そういった意味では、「保護者との関係」「保育の改善」最後に「幼児教育を途上国で行なうために」っていう注釈も入れるが、いずれにしても、それぞれの途上国で保育者が自立して幼稚園を作っていく、あるいは、幼稚園の保育を良くしていくために、何ができるか、ということ、専門的な言葉で言うと、いかに途上国の保育者のエンパワーメント、力を引き出し励ませるか、そのための一つのヒントになるような、ヒント集としてのハンドブックというものを我々は提供しよう、と思っている。

◇これからの予定

・とりあえず日本語として完成した後、英語に直して、3 月末までが締め切りなので年度末刊行を目指して、なんとか日本語版英語版を作りたい。

・日本語も英語も色んな意味で足りなかったり、不適切な表現も入っているかもしれないが、とりあえず今年度完成して、試作版を来年度色んな方に見てもらい、また、どこかの国で実際に、何かの形で使ってもらって、来年度以降、毎年のように改訂していきたい。そのために色々なヒントを頂戴できればと思っている。